

氏名(本籍地) 森蔭直広(兵庫県)
 学位記および番号 博士(歯学), 第355号
 学位授与の日付 平成29年3月10日
 学位論文題名 「Topographical relationship between positions of lingual foramina and attachment of mylohyoid muscle in mental region」
 論文審査委員 (主査) 原田卓哉教授
 (副査) 関根秀志教授
 宇佐美晶信教授
 高田 訓教授

論文の内容および審査の要旨

【研究目的】舌孔の有無が下顎に対する外科的処置後の内出血に関連している場合がある。過去に舌孔に関しての研究は行われているが、出血の要因と考えられる周囲の軟組織との関係についての報告はなく、実際の舌孔出現部位を特定できる研究はほとんどない。そこで、顎舌骨筋に着目し、付着部に対する垂直的ならびに水平的な位置関係より、舌孔の出現部位と周囲軟組織との関連について検討を行った。

【研究方法】奥羽大学倫理審査委員会の承認(承認番号105号)を得て奥羽大学実習用遺体20体を研究に用いた。まず、顎舌骨筋を剖出し、下顎骨への付着部にマーキングしたのちに、歯科用コンビームCTを撮影した。得られた画像データから舌孔の出現部位と顎舌骨筋付着部を観察した。

顎舌骨筋線を垂直的基準とし、上方を舌下隙、下方を顎下隙に分類した。さらに、顎舌骨筋線の垂直的位置を把握するため、正中部におけるオトガイ棘と下顎下縁の距離と、各部における顎舌骨筋付着部と下顎下縁の距離を計測し、その比率を求めた。近遠心的基準として、オトガイ棘外側縁とオトガイ孔前縁の間を2等分し、オトガイ棘側およびオトガイ孔側として、舌孔の出現部位を分類した。

【研究結果】観察された舌孔の全数は37個であった。内訳は舌下隙には16個で、その中でオトガイ棘側に6個(37.5%)、オトガイ孔側に10個(62.5%)であった。顎下隙には21個で、オトガイ棘側に1個(4.8%)、オトガイ孔側に20個(95.2%)であっ

た。顎舌骨筋線の下顎骨での垂直的位置関係は、オトガイ棘後方で平均 5.5 ± 1.4 mm, 中央で平均 7.1 ± 1.7 mm, オトガイ孔前方で平均 8.5 ± 1.9 mmであった。正中部での下顎下縁からオトガイ棘までの距離で除した値はオトガイ棘近位端で 51.9 ± 17.1 %, 中央で 66.6 ± 20.0 %, オトガイ孔遠位端で 79.2 ± 21.4 %であった。

【考察・結論】本研究では、オトガイ棘側では舌下隙、オトガイ孔側では顎下隙に舌孔が多く開口していた。顎舌骨筋線の垂直的位置は、正中付近では下顎下縁からオトガイ棘までの距離の中央に位置し、小白歯部ではより上方に存在していたことから、歯の喪失に伴う形態変化の影響が少ないオトガイ棘をランドマークとした顎舌骨筋線の垂直的位置の推測が、顎骨手術に伴う術後の内出血の術前診断に有用であると考えられる。

本論文に関する一次審査は、平成29年1月10日午前10時から行われた。審査委員は、平成28年12月22日に配布された本論文を真摯に読み、学位論文としての学術的な価値について詳しい検討を行った上で審査に臨んだ。一次審査では、初めに申請者から論文内容について詳しい説明があった。次いで審査委員からは、論文の各項目に関して以下の質問があった。1. 有歯顎無歯顎の検討の有無、2. CT画像と剖出した際の差異、3. 過去から現在における舌孔の定義の変化、4. 今後の課題について質問があった。

質問に対して申請者からは、論文に記載された内容と整合性のある的確な回答を得ることができた。なお、論文の文章ならびに図表の加筆訂正を指摘し、一部修正を求めた。申請者は、それを了解して直ちに修正を行った。

これらの結果、本論文はオトガイ部における舌孔の出現部位と顎舌骨筋との位置関係に関する新たな知見を示したものであり、今後の顎骨手術に伴う術後の内出血の術前診断に寄与するものと判断できる。したがって、一次審査委員会は提出された論文が学位論文としての学術的価値を持つものであり、申請者に博士(歯学)の学位を授与できるものと判定した。

掲載雑誌

Surg Radiol Anat. Vol. 39, 735-739, 2017.